

寫實的な刻み方、一般佛像と比例を異にして肩狭く腰廣き忠實なる人體寫生に基ける體軀の構成等に留意する時、特にその感を深くするものがあるであらう。かくの如きは當代佛教の一特質たる現世的傾向と、當代を風靡せる唯美的思想とを製作の背景として考へて初めて理解せらるべきであつて、例へば當時に於ける頻繁なる阿彌陀堂の造營が、此世ならぬ極樂淨土を現世に顯現せんとする貴紳の已み難き希求に出でたるものであると同様に、本像の造顯も亦現世の限りの美々しさを凝らした生身の女人をかりて、此世ならぬほとけを顯したものであつて、その時代と、その作者とを得て初めて、豔麗豐美等倫を絶するこの傑作を見しものと云ふべきであらう。

近時本像の摸作を作つて原像の面目を永世に傳へんとするの議起り、關野聖雲氏の手によつて本像の忠實なる復原摸作三體を製作し、一は東京帝室博物館に、一は東京美術學校に、一は恩師高村光雲氏の許に夫々納められる事になつた。

(正木)

### 三、吉祥天女像

木造 着色立像 高五七・九寸

福井縣 清雲寺 藏

(丸尾彰三郎「淨瑠璃寺及清雲寺の吉祥天女像」参照)

### 四、阿彌陀如來像

木造坐像 高一〇三寸

東京府 八橋徳次郎氏藏

藤原時代の中期、佛師定朝出でて佛像彫刻に一の規範を制定してより、その様式及び量度法は永く後世に踏襲せらるゝに至つた。殊に當代末葉にかけて造られた佛像は多少の差こそあれ、概してその影響下に置かれたるは否み難いのであるが、而も他面には、時を同じうしながら定朝の嫡流系統のものとその他の埒外にあるものとは、その特質に於て自ら徑庭の存してゐたことを認めなければ

ならぬ。こゝに掲載せる八橋氏藏阿彌陀如來像も亦後者に屬する遺例の一として擧ぐべきものであらう。

いま試みに、本像と年代を同じくする一遺像、即ち法金剛院本尊阿彌陀如來と比較すれば、同像は待賢門院が供養建立せられたと傳ふる同院御堂と前後して大治五年頃の造像であり、正しくその相好圓滿にして柔和の相を持し、肉髻は低く螺髪は細密に刻出され、髷線の彫法また婉曲の致を極め丈六坐像の姿態よく權衡の度に適ひて、自ら藤末の雅正なる趣致を藏してゐる。たゞ時の下降に伴ふ様式の系統化と技法の極度に馳せたる嫌は認められるが、而も純然たる定朝様式の系統に屬すべき作品であるが、本像はその相好、鼻は短く、下喙の縁取に劃然たる刀法を用ひて一種嚴肅な相貌を示し、肉髻は高く、衲衣の髷線は淺き彫法ながら然も粗豪の強さを藏して古様式の手法を止め、頬顴や胸腹部には量的感の強調が認められる。且つ其寄木内刳法に於て、本像の胴體の左右側、背面の刳合及び兩手の接合の部分は全體同時代通途の手法よりなるものであるが、頭部と胴體とが一木彫に成り、膝部と胴體との接合法の稍異なるは

八橋氏藏阿彌陀如來像胎内銘

(八橋氏所有原板に據る)

明に古様式の遺存が指摘される。かゝる相異より推して攷ふるに、本像は同時代の中央に於ける佛所の彫像法とはまた別派の手法によつて製作されたもの、即ち地方的特質の加味されたものとして、考ふべきものではなからうか。

而して本像の頸の部分と膝に垂るゝ衣の端とに、漆箔の細片が僅に残り、右腋下に緑青、腹部と膝部との一部に朱、また面部や胴體の凹處に胡粉等の彩色の跡が認められるは、もと漆箔に莊嚴されてあつたものが時齡を重ねるに従つて剝落し、中古に於て五彩を施し、更にまた次第に褪色したと考ふべきか。而してまた、肉髻及眉間に嵌入せる白毫と右耳の端と兩手頸及兩膝の附根の部分は全く近來の修補に係るものである。尙本像の背面剝板の胎内面には左記の銘が墨書されてある。(挿圖参照)

敬白

奉造立六尺阿脇陀如來一軀

偏爲現世安隱後生善耶文包依女竹野中知子

并野生愛子定光後結女同包時結女同包末結女

同包重結女同□子同中知子同三子同四子同包本

僧□□□□禪行紀中知子□原包國上則貞

□□□□國□光守安栗田國清安部安清

大中臣爲近國久包貞文近末

□原武元并愛子<sup>等カ</sup>

大治五年十一月十四日

この銘記は考古學會發行の「造像銘記」にも採録されてあるが、その判讀に於て二三の相異がある。(造像銘記五九頁參照)而してこの剝板と胴體との矧合目の上部に、判讀不明の文字が二字墨書されており、人或は道教關係の文字かと疑ひ、或は造像者の記名かと推し、或は矧合せの符徴ならずやと想像する向もあるが、その意義全く不明である。

尙また本像の傳來に關しては、もと河内國井深の里の西恩寺に在つたものが、後同寺退轉して民間の手に移され、大正七年頃松田福一郎氏の所有となり、同時に奈良美術院の菅原大三郎氏の手にて修補せられ、終に昭和二年八月に現所

藏者八橋氏の有に歸したと云ふ。因に本像は昭和六年十二月に國寶に指定された。(菅沼)

## 五、一七、法然上人繪

神戸市 男爵川崎武之助氏藏

卷子裝 紙本着彩 各卷堅 四〇・五厘 第一卷全長 一二四五厘

第二卷全長 一〇一八・三厘 第三卷全長 九七四・五厘

(田中喜作「弘願本法然上人繪に就いて」參照)

## 八、金錯銅筒

東京美術學校藏

長二五・五厘 徑三・五厘 厚〇・一二厘

木部 長二九・七厘 徑二・七厘

この程東京帝室博物館に開かれた周漢文化展覽會を觀た人は、侯爵細川護立氏所藏の金銀錯銅筒と共に並べ置かれたこの銅筒の、永き土中を物語る沈んだ緑青の地に、黄金の細絲の錯綜して鏤められて、絢に美しいのに心を牽かれたことであらう。

中空、兩端は開放され、徑一寸餘り、長さ尺にも充たぬ圓筒の、竹に似て三つの節を有つのみで、文様を除いては、形の上に何の奇もない。

その表面を、ところ狭きまでに、精緻を極めて埋め盡した金錯文は、自由な細線の亂るゝ如くまつはつて、糸象眼を主とした中に平象眼を併用し、巧みな抑揚を以て、絢爛さを退屈から救つてゐるのも味ひが深い。一見して圖様を辨へることはむづかしいが、眼の觸れる所必ず動物あり、動物は意外な程寫實に描かれて、潑刺と活動する。大膽に金を用ひて目立つのは、虎の身を反して疾驅する姿で、よく見れば、馬上に振り返つてその喉元を狙ふ獵人がゐる。下端には、尾翼を擴げ、仰いで珠を銜へんとする孔雀が、比例を無視して大きく、華かに描かれてゐる。鹿の岩蔭を躍り出るもの、犬の兎を追うて走るもの、雁の列をなして飛び行くもの、更に圓筒を廻轉して注意深く畫面を辿るならば、